

みづぼく 私の逸品 砥石入

標本番号 H0014863
地域 長野県諏訪郡北山村柏原（現・茅野市内）
受入年 1975年
特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」にて展示中

民博 民族文化研究部

近藤 雅樹

この砥石入は、昭和三年二月に今和次郎が採集した資料である。附表には、採集地が「長野県諏訪郡北山村柏原」（現在の茅野市内）である旨の記述がある。また、備考欄に「ぼろ布にて編む」とあるように、稲わらに細く裂いた布切れを縷いこんで堅牢なつくりをしている。山仕事に出かけるときなどに、腰に提げて持参した。砥石入だが、この資料には砥石が入ってない。早くから渋沢敬三と親交があった今が、渋沢が主宰するアチック・ミューゼアムの民具研究に協力するため、調査旅行先からもち帰った資料のひとつである。

今和次郎（一八八八—一九七三）は青森県弘前市に生まれた。東京美術学校（現在の東京芸術大学）を卒業し、早稲田大学で建築学を教授するとともに、建築設計にも携わった。民俗学者の柳田國男らが組織した民家研究会「白茅会」の活動に参加したことを機に、民家研究に着手して重要な足跡を残した。画技にすぐれ、その力量を民家研究や考現学調査に活かして数多くのスケッチを残している。

考現学は、今が提唱した「現在」を研究対象化しようとする学問・思想である。昭和初期の急速に大都市化していく東京の街の様子や、人びとの生活の変化を採集（観察・記録）し、その分析をめざした。

建築家としての活動には、関東大震災直後の街頭に急ごしらえのバラック建築をペンキで装飾した「バラック装飾社」や、積雪地方のくらしを快適にするための試験家屋の試み、村の共同作業場の設計、小住宅の設計などに携わった。第二次世界大戦後は、日常生活を考察する生活学や服装研究といった新しい学問領域にも関心を深めて展開していった。こうした幅広い領域にわたる活動の根底には、くらしの営みを「ひろい心でよくみる」ことよって、同時代人とともにくらしのかたちを創造しようと模索し続けたまなざしと共感があつた。

